

01

躍動する身体 - 2019年度活動報告

交差する感覚、アートワークとブレイクダンス

“YAKUDOW” Body movement
- Artist activity report for FY2019.

Sense crossing, Art works and Break dance.

デザイン学科・助手

Department of Visual Media, Design, Fashion Design・Position

辻 將成 Masanari TSUJI

はじめに

アーティスト 辻將成について、2019年度の制作・研究・発表の活動記録を報告する。

空間と身体、光をテーマに東海地区を中心に作品を制作しているアーティストで、彫刻・インスタレーション・写真・ペインティングなどジャンルにとらわれず、様々な作品を生み出している。そして、作家であると同時に現役のブレイクダンサーでもある。ダンスが生活の中心にあり、それをヒントに私にしか出来ない芸術への切り口を探求し始め、身体というテーマを中心に置き、制作をしている。

独学で10年以上続けて来たブレイクダンス、人間離れた動き、それは人を魅了し感動させる。踊りの持つ躍動感・迫力、瞬間芸術とも言えるそれは、私が作品を作るための鍵である。

ここで報告する作品の制作方法は、踊りから生まれる動きの連続性を、ライトとカメラ(一定時間の長時間露光 撮影機能)を使い、写真の中に動きの痕跡としてヴィジュアル化するものである。暗闇で光を使うことで、明るい場所では捉えることの出来ない動きの軌跡・連続性をカメラで捉えることが出来る。踊る身体が動くスピードにより、身体を写すのに必要な光が身体に当たらず、あるはずの身体は写真の中でその存在を消す事が出来る。写真に写る無数の光による軌跡を、躍動する身体の痕跡・過ぎ去った時間の芸術として表現し、瞬間を切り取る写真には存在しない『時間の流れ』と『身体の動き』という概念を存在させている。

まるで炎やオーラの様にも見える、動きの軌跡を映し出した写真は、鑑賞者に新たな身体表現の気付きを与えるのではないかと考えている。

暗闇を舞台にした一枚の写真の中に身体のエネルギーを感じさせる『生』の動きを可視化させる事が目的である。

ダンサーとしての活動も日本全国・国外でも行っており、2017-2018年のイギリス・ロンドン芸術大学 Central Saint Martinsへの留学時には、ロンドンの大会での優勝や、ポーランドの世界大会へ日本代表ゲストとして出場など、活動の場を広げた。

プレイヤーとしてだけではなく東海地区を中心に、スタジオインストラクターやイベント企画・運営なども行っている。作家として、またダンサーとして表現を追い求めている。

私の作品スタイルは、自分自身がパフォーマーであり、作品でもあることが大きい。

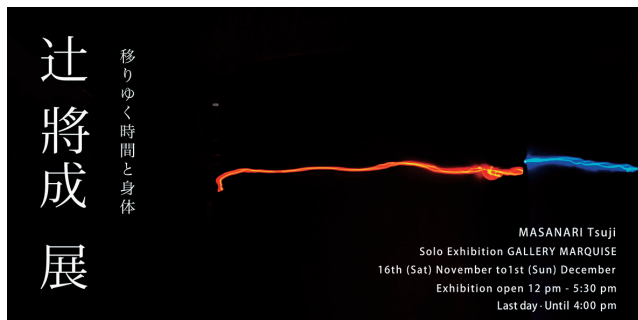
ここで報告するのは私の活動と、上記制作に基づいた作品発表と、ワークショップの内容・記録である。

1 Gallery MARQUISE 企画 個人展覧会

1.1 『移りゆく時間と身体』2019

11月16日(土曜) - 12月1日(日曜)

名古屋市昭和区石川橋



1.2 展覧会・作品内容

三度目の個人展覧会となったマルキーズでの展示。2019年の新作のみの展示で計画を進めた。ギャラリーはコンクリート壁が一面あるホワイトキューブで身体サイズの大作品といくつかの小作品で構成し、外からも目をひく展示となった。この展示のメインの作品はW4000 H1000(mm)の平面作品である。そのほかにも映像作品や、作家自身のダンスパフォーマンスも実施した。



写真1/展覧会風景・作品プレゼンテーション

撮影者: 堺省吾

1.3 研究・制作内容

制作プロセスから展示まで、これまでの作品ヴィジュアルからはいくつかの変化を見せた。2018年度より、LEDテープを頭・手首・足首に装着し、踊りの軌跡を線で捉えてきた私の作品スタイルだが、この展覧会で見せた最新作、光源となるのはスニーカーのみ。地面と接しているスニーカーの底面にLEDが仕込まれたものを使って撮影した。

制作のきっかけとしては、地面との境界線に横一線の光の軌跡を露光したいという動機からである。踊りによって生まれる素早い足の動きを、私自身いつも追うことが多いことから足だけに光源を着けてみたいと興味が浮かんた。

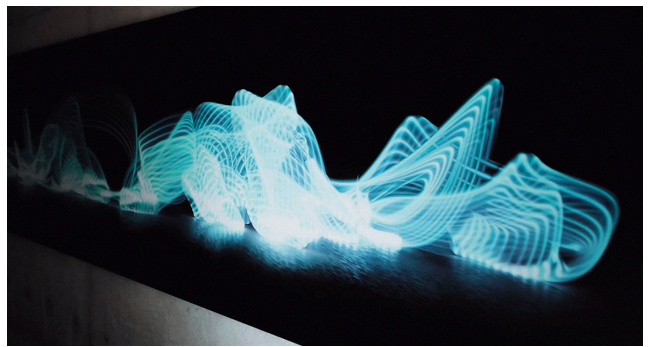


写真2/展覧会風景

撮影者: 堺省吾

制作は暗室で、カメラと私との距離を測り撮影し、等身大の倍率で写真データを出力する。横一線に踊る行為により、空間を切っていくような躍動感が作品に刻まれている。ブレイクダンス特有の不規則な動きと足に集中させた表現は、暗闇の空間に奥行きと広がりを見せ、以前の作品より写真の中に存在する空間が意識出来るものになった。



写真3/展覧会風景・パフォーマンス

撮影者: 堺省吾

1.4 展覧会を終えて

新たな経験と発見の多い展示で、発表する事の重要性を改めて感じた展覧会であった。新たな展開となった横長の作品はこれまで作品を見てきて下さった方々にも、変化を与えたようで、良い反応が返ってくるが多かった。制作スケジュールなども上手く進んだことで、焦らずに時間をかけ展示を迎えられた。美術関係の方以外にもデザイナーの方や、教員を含む大学関係者や学生、ダンサーやパフォーマンスアーティストの方にも、足を運んでいただいたのは大きな感謝と共に、良いプレッシャーに変わるものであった。

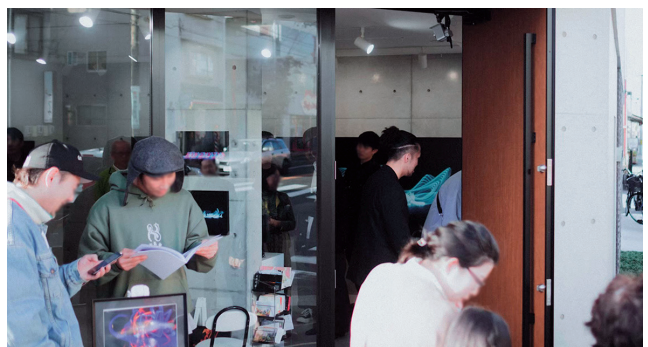


写真4/展覧会風景

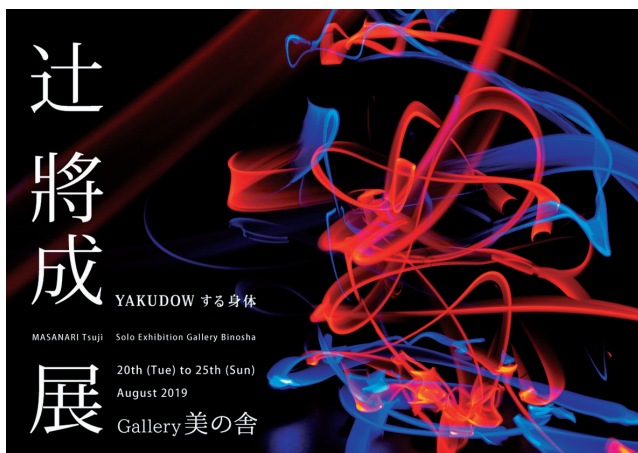
撮影者: 堺省吾

2 Gallery 美の舎 個人展覧会

2.1 『YAKUDOWする身体』 2019

8月20日(火曜) - 8月25日(日曜)

東京都台東区谷中



2.2 展覧会・作品内容

この個人展覧会は、2018年に行われたギャラリー美の舎主催の公募展にて入賞し、奨励賞として個展の権利を獲得し実施することになった。作品はこの展覧会までの作品(2018年度)とは変わり、今まで赤のイメージが強かった作品から、色を足し、変える事で他のイメージや、頭・手・足それぞれの動きや可動域にも、鑑賞者の思考が巡る展覧会を試みた。

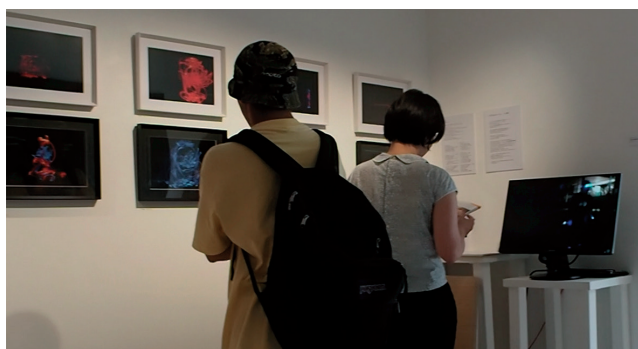


写真5/展覧会風景

2.3 研究・制作内容

これまでの作品では一色の光を使い、身体のイメージ・動きの痕跡を露光して作品として表現してきたが、五つのLEDの色を変えたら更に動きは細かく、どこをどの動きが通ってこのストロークを残しているのかが見えると考えた。実験は何色ものLEDテープで行い、作品として身体性を感じヴィジュアル化して良いパターンを探した。血液の赤から、動脈と静脈というテーマを2018年の前作でも展開したので、赤と青のイメージを持ち込みメインの作品を制作。そのほかにも、手、足の動きを追いやすくした作品や、別の色の作品が生まれた。



写真6/展覧会風景

2.4 展覧会を終えて

場所が東京ということもあり、初めて作品を見ていただく方が多く、新鮮な声がたくさん聞けた。色の要素を多く持ち込むことは、動きに視点が向くという点では良かったが、展示自体のバランスには課題が残る形となった。現在の制作には身体のエネルギーや動きが持つパワーを、純粋に表現しようとする事こそ重要であると、再確認出来た展示である。

3 愛知県 刈谷市 ワークショップ

3.1 ダンス × 中高生 × アート

- 辻 将成 アートワークショップ

2019年8月7日(水)、刈谷市総合文化センターにて、『NPO法人スコープ』と『刈谷市役所生涯学習課』主催の元、刈谷市内の中高生を対象にアートワークショップを行った。



3.2 内容

私の作品・研究内容と繋がる形で、光を使ったワークショップを実施した。それまでの作品は、私の身体と踊りの表現が被写体であり、作品の肝になっていたが、このワークショップでは刈谷市総合文化センターのリハーサル室に暗室を作り、中高生たちに光を委ねるというものである。実施にあたり中高生の思考力を期待し、自由度の高い表現を目指し、パフォーマンスと制作を同時に実施する流れを計画し、実施した。



写真7/ワークショップ風景

3.3 実施記録

まず最初に行ったのは、ダンスのレクチャーである。

私は制作時にブレイクダンスの動きを使って、身体の躍動感やエネルギーのイメージをアウトプットしている。つまり欠かせない要素だ。この時集まった参加者にダンス経験者は0人、なので簡単な予備動作と、動きが大きくなり作品に光だけが残るような、スピード感を出す為のステップをレクチャーした。

参加者は最初に私が踊る様子を観察し、動きを真似する。そして過去の作品など、参考になる映像を見せてイメージを作ってもらい実動に入る。ステップは出来るようになったら、その後で各々が自由にダンスするように促し、プログラムを進めた。

撮影準備終了後、部屋を暗室にして作品の撮影、ワークショップの本題へと移った。撮影は毎回その場所に合わせてカメラの設定なども変更して行く。このワークショップでは光源も普段の制作で使っているものとは別のモノを使用したのと、場所も被写体も違うという、チャレンジであった。

長時間露光は問題なく成功し、写真の作品は完成した。実施時に懸念していた、光の強さに関しても、暗室がしっかり出来たので、問題なく写すことが出来た。このワークショップをきっかけに、現在は自分以外のダンサーや、他のパフォーマンスにも焦点を当て、研究を行っている。

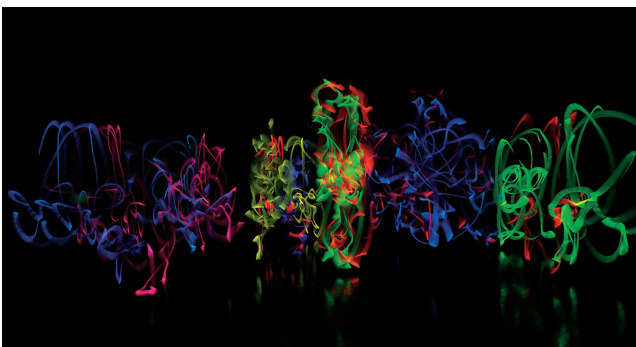


写真8/ワークショップ風景・作品

4 おわりに

2019年度の活動は2018年度のブラッシュアップが主な内容だった。これまでの作品は私自身の身体が制作の中心にあったところから、他者の身体や、人以外の動きへ興味を湧いた事も大きかった。この点に関しては更に研究していきたい。

私以外の身体を意識して制作を行うことで、また私自身の身体への意識が強くなり、パフォーマンスも含めアウトプットの幅が広がったように感じた。空間と身体という大きなキーワードについて、以前よりも考察を膨らませることが出来たとも感じる。

とはいえ、自身の成果には満足しておらず、作品についても他の素材、表現方法を研究し、芸術への関心と成長を止めずに挑みたいと考えている。

彫刻専攻で学んだ大学院時代から現在も彫刻は私の意識に深く入り込んでいて、外側から物体を彫り刻んでいく制作を意識する事で、私が行っている作品の概念を探求出来ている。

つまり、身体が中心にあり、外側の空間を彫り刻んでいくイメージを持つ作品形態と、繋がっていくのである。この点についても更に試行錯誤し、制作・発表したいと考えている。

この先の活動に向けては、2019年度は少し雑味があり、駆け足で進んだ一年であったように感じる。この1年間の活動を更に飛躍させるべく、2020年度は新たな研究と制作、そして発表というプロセスを丁寧に踏んでいく事に重きを置きたい。

写真撮影協力(展覧会)

[1]写真1-4 / 堺省吾 (2019)